

フレーブニコフと日本

——『二人の日本人への手紙』を中心に——

亀 山 郁 夫

1

フレーブニコフの世界観の変貌を語るうえで見落とすことのできない伝記上の事件のひとつに、一九一六年の従軍体験がある。この年の四月、モスクワから故郷アーストラハンにもどって間もなく彼は応召を余儀なくされ、ツァリツィン（現在のヴォルゴグラード）第93予備隊に一兵卒として配属されることになる。放浪の半生を送ったフレーブニコフにとって、実際は懲罰隊にも等しい軍規の下での生活がどのようなものであったかは、N. クリビーン宛の手紙やペトロフスキーの回想にくわしい。「こどもが死ぬようにぼくも死んでしまった」⁽¹⁾と書き、「救命帯」を投げてくれと懇願する彼は、文字通り詩人としての生命の危機すらも感じていたにちがいない。⁽²⁾しかし一方でこの従軍体験は、際立ってナショナリスティックなこの未来派詩人に重大な精神的変化をうながした点においても、いくつかの興味深い問題を投げかけている。

そもそもフレーブニコフの世界観の根底にあったのは、広い意味での異教回帰の精神である。それはロシア・アヴァンギャルド芸術の出発点をなす原始主義の基本的な精神であると同時に、詩人のいわば原体験ともいふべき「対馬」がもたらした反西欧、反近代の精神でもあった。それは、ある時は「スラブ・アルカディア」への遙かな憧れとなって、初期の牧歌詩の成立に深くかかわり、またある時は、第一次世界大戦前夜の不穏な空気のなかで、なかば好戦的ともいえる、汎スラブ主義的立場からの言動を生みだしている。つまり異教回帰が必然的にはらむこの二重性は、フレーブニコフの作品世界にふたつの異なった相貌を分かち与えることになるのである。

だが、スラブ世界の団結という詩人のファナティックな「幻想」は、大戦の勃発とともに音を立てて崩れていく。文集『奪取した』（1915）に発表されたユートピア的な提案の数々、タトリンとペトロフスキーがツァリツィンで開いた反戦集会のための報告『鉄の翼』、さらには『戦争—死』、『死の妻』、『湖の死』といった一連の作品は、いずれも戦争肯定論から厭戦的な気分へと傾斜し

ていく詩人の姿を浮彫りにするものといってよい。しかしそうした中でとりわけ興味を引くのは、「時間の法則」の発見にもっとも深く埋没したこの時期の彼が、『Ka』(1915),『捕囚』(1916)といった散文の作品をものし、アジアやアフリカへの共感を急速に深めていくことである。これら二つの作品は、詩人独特の時間的観念と詩的イマジネーションの高度の結晶を示すもので、エジプト古代からアショカ時代のインド、さらには現代にいたる歴史的時間を自在に飛遊するカーの「魂の運び」といった表現や(『Ka』),「マーヤー——それは世界靈魂であり、梵天なのだ」という婆羅門教徒の言葉(『捕囚』)にみられるように、人間の生と死の幽玄な世界を神秘的な土俗性のなかに描きだしたものである。そこには、アジア的な生命の本質に迫ろうとする詩人の気迫をはっきりと見てとることができよう。

しかし、彼はそうしたアジアへの共感をたんに作品のなかで表現するだけでは満足できず、これをより明確なものとすることで、自らの行動原理にまで高めたいと考えていた。その最初のマニフェストが『二人の日本人への手紙』であった。1916年十月、日本の親善使節団が残した「国民新聞」掲載の日本人青年による日露友好の手紙に触発されて書かれたこの『手紙』は、戦争に熱中する「大人たち」に対抗し、アジア青年たちの真の連帯を呼び掛けたもので、『火星人のラッパ』(1916)に始まる後期未来派運動の最初の文集「ヴレメンニク」第一号に発表された。詩人の世界観の新たな展開が、日本への関心とここでふたたび結びついていることに注意しなければならない。⁽³⁾ この『手紙』によって詩人のアジア観はきわめて具体性を帯びたものとなり、その内部に深く根を下ろすかのようにみえる。がしかし、この『手紙』が詩人の思想形成の文脈の中で持っている本質的な意味をさぐるには、詩人にとって日本がかつてどのような位置を占めていたかを多少とも振り返っておく必要があるだろう。

フレーブニコフが日本に関心を抱く直接のきっかけとなるのは、1904—05年の日露戦争である。戦争勃発後まもなく、彼は独学で日本語を勉強しはじめており、「日本語に独自の表現形式を探しているのだ」という彼の言葉をギムナジウム時代の友人が伝えている。⁽⁴⁾ しかし、この時点での彼の日本への関心にとりたててさしせまったものは感じられない。フレーブニコフにおいて日本が決定的な意味をもつのは、1905年5月の日本海海戦におけるバルチック艦隊の壊滅である。彼はこれをきっかけに「時間の法則」の発見という遠大な試みに没入していくことになるが、その時、彼のナイーブな政治的感性にするどく突きささっていたのは、民族主義者としての屈辱のいたみであり、ロシア国家の

崩壊という切迫した予感であった。『運命の板』で彼はその経緯を次のように説明している。

「時間の法則を探究するという最初の決心を行ったのは、対馬の翌日である。対馬での戦いのニュースが、ヤロスラーヴリ県ブルマーキノ村にまで届いた時で、その頃、ぼくはクズネツォフ家で起居していた。

ぼくは、死への弁明を見いだしたいと思ったのだ」⁽⁵⁾

フレーブニコフにとって「対馬」は、同胞の死といういわば単純な現実でもあった。敗戦のショックを書き綴った『ものはみなあまりに蒼く』で、詩人は、対馬海峡を漂流する水兵と自己を「われわれ」という発語のなかに一体化させているが、「死への弁明」を見い出したいという衝動の内側には、そうした死への生々しい想像力が息づいていたのである。

「対馬」のテーマは、その後もいくどとなく彼の作品世界に蘇ってくる。マリネッティがロシアを訪問した際、彼はある手紙のなかで⁽⁶⁾「われわれは何も外部から接ぎ木する理由はなかったのだ。なぜならわれわれが未来に飛び込んだのは、1905年からだったからだ」(N-368)と書いたが、この「1905年から」という言葉が第一義的に意味するものも、一般に考えられているような⁽⁷⁾第一次ロシア革命では決してない。彼はそこに、自らが『対馬』以後の世代に属する詩人としてのアイデンティティを表明したいと考えていたのである。

フレーブニコフの日本への関心は、このようにほとんどが「対馬」体験と結びついており、詩人の「出発点」としての意味あいが執拗なまでに強調されている。しかし、日本の文物そのものに対する関心もそれに劣らず強いものがあった。1913年のはじめにクルチョーヌイフにあてた手紙で、詩人は「日本の作詩法」へのユニークな洞察を次のように展開してみせる。

「日本の作詩法。それには韻がないが、歌うようである。四行からなっている。まるで種子のように思想をはらみ、羽か、それとも種子を囲む綿毛のように世界の幻影がみえる。ぼくはこう確信している。すなわち、韻への匿された敵意と多くのものにきわめて固有な思想への要求は、日本のすばらしい言葉の法則がわれわれの大地に降り注ぐ雨の直前の天候なのだ」と(V-298)

日本の伝統詩のもつ自由詩的な要素への注目が、フレーブニコフの詩にも少

なからぬ影響を与えていたことがこの言葉から理解される。伝統的な枠組みとしての韻律法を意識的に排除しようとした彼は、対象そのもののヴォリュームを直接的に喚起し、より広い意味の領界（＝思想）を獲得するためにあらゆる努力を払った。そしてその集約的な成果のひとつである四行詩が、日本の短歌を模して作られ、しかもそこに将来のロシア詩が迎えるべき道を予見していたということはおおいに注目すべきであろう。⁽⁸⁾

さらには、当時ヨーロッパ中に圧倒的人気を誇った「花子」一座への興味もある。このテーマに関する研究はおろか、作品そのものが刊行されていない現状では、細部への立ち入りはむろん不可能だが、N. ハルジエフが指摘するところでは、フレイブニコフは「花子」一座が演じた時代劇をモチーフにした物語詩を書いているらしい。もっとも「花子」一座への熱中は立体未来派の詩人、画家全体に及んでいたらしく、『裁判官の生簀』第二号（1913）にはM. ラリオーフが描いた花子のポートレートが収められている。⁽⁹⁾ また、『十三の短歌。蝶』のように、一匹の蝶のイメージを中心に日本の風景への自由な連想を書き綴った作品もある。

「蝶はしばしば、鱗の鎧をかぶった古代の侍を描いた絵はがきに目をやる。鼻梁へと下に落ちるその傲慢な眉は、漁夫たちや砂浜や魚網を照らす日の出の富士山から岸に向かって飛んでいく海ワシの翼のようだ」（Ⅳ—324）

テクストロジーの点で多くの疑問点を残しているこの作品は、執筆年代も不明であり、正確な判読はほとんど不可能といってよい。作品の下敷きとなったのは、おそらくフレイブニコフが好んだ葛飾北斎の浮世絵ではないかと想像されるが、それも確かではない。ただ、彼の作品のなかで「蝶」のイメージが、しばしば詩人のメタファーとして用いられていることを思えば、絵葉書に見入る蝶のイメージは、詩作する詩人の姿を暗示的に表現していると捉えることもできよう。

しかし、こうした日本への関心は、多かれ少なかれ文学の枠内に留まっており、日露戦争直後、戦勝国日本へのはげしい敵意と怨念をみなぎらせた彼の政治的関心その後どのように変化したかを考える材料にはなりえない。そうした視点から見れば、むしろ、1915年に発表された『1915—1917年の戦闘。戦争に関する新しい教え』に、彼の日本観の変貌をさぐるべきではないだろうか。この小冊子は、「対馬」体験以後、約十年の歳月を経て初めて「時間の法則」

理論を独立した形でおおやけにしたものだが、ここにはすでにロシア対日本という構図はなく、「対馬」理解も以前とはまったく異なっている。彼がこの「運命の楔形文字」⁽¹⁰⁾で明らかにした時間の法則とは、317年およびその倍数年ごとに海戦が発生し、国家の運命にさまざまな変転が生じるというものである。したがって1905年の日露戦争は、1588年の英西戦争の歴史的呼応であるという結論が導き出されてくるが、フレーブニコフはそこからさらに、歴史上のすべての事件は、あらかじめ予定された世界史という悠々たる存在の鎖を繋ぐ環のひとつにすぎないのだという認識へと立ち向かう。

§7

「民族の門」とも呼ぶべき系列がある、というのは以前は影に隠れ、誰にも知られることのなかった新しい民族がそこを通るからである。

1905 日本人

1588 アングロサクソン人⁽¹¹⁾

この言葉に生死流転の思想のきざしを見てとることは容易だろう。だが、詩人がこうした視座の高さへ至るプロセスが、「時間の法則」を発見するための十年間の「惻愴な知的計算」(V-241)を経たものであることを忘れてはならない。それは「思想」というよりもむしろひとつの新しい現実であった。「数は時おり、ぼくの中に文字や楽譜よりも大きなエモーションを引き起こす」⁽¹²⁾と語る詩人は、純数学的な合理性のうえに築かれたこの「無時間」の宇宙に、ひそかに、ニルバーナの世界を見い出していたのではないだろうか。フレーブニコフが「口に泡をうかべる」古代の予言者のエクスタシーを斥けたのは、たぶん未来派詩人の宿命だったとあってよい。しかし、言葉を代えれば、トラウマと化した「対馬」の傷を癒しうるものは、数の絶対性をおいて他になかったということなのである。フレーブニコフが見い出した「死への弁明」とは、おそらくそのようなものであったにちがいない。

2

第一次世界大戦が次第に泥沼化の様相を呈しはじめた1916年七月、東部戦線で苦境に立つロシアは日本との間に日露協約を締結し、両国は事実上同盟関係にはいった。この協約には、満州、蒙古、中国の勢力圏をめぐる日露両国のさまざまな政治的思惑がからんでいたが、日本では、ポーツマス条約のしこりも

とれて、にわかに友好親善ムードが漂いはじめた。同年八月、貴族院は、ロシア政府の特使として来日したゲオルギー・ミハイロヴィチ大公への返礼として、日露協会の総裁である閑院宮戴仁親王及び内山小二郎待従武官長以下八名の随行員のロシア派遣を決定する。

当時、「朝日」、「毎日」などとともに全国有力紙の一つとされていた「国民新聞」は、徳富蘇峰を主幹として久しく帝国主義的政策を擁護してきたが、協約の締結を記念して「日本青年より露国青年に与ふる書」と題する懸賞文を募集し、日露関係強化の雰囲気づくりに一役かうことになる。九月十一日、遣露使節団一行の出発にタイミングをあわせて特別記念号が出され、「遠き盟友に寄するわが青少年少女の至情を見よ」という見出しで懸賞文と絵葉書の当選者が発表された。600篇を越す応募者のなかから一等賞に選ばれたのは、東京麴町に住む山名塩太郎という青年であり、二等賞は北海道夕張郡の村田要助、三等賞は東京府下代々木に住む森田東洋がそれぞれ選ばれた。入賞した三篇の懸賞文は、瀬沼恪三郎のロシア語訳付きで同紙の特別記念号に掲載された。閑院宮以下遣露使節団の一行は、この特別記念号を携え、⁽⁴³⁾ 長春、ハルピンを経て同二十三日にモスクワに到着し、ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公やチェルノコフ・モスクワ市長らの出迎えを受け、同二十七日には、露都ペトログラードに入り、ツァールスコエ・セローでニコライ二世に拝謁している。

フレーブニコフが、山名塩太郎と森田東洋という二人の日本人青年の手紙が転載された「ルースコエ・スローヴォ」紙（九月二十一日号—旧暦）を手にして、⁽⁴⁴⁾『二人の日本人の手紙』の執筆を思い立った動機とはどのようなものだったのか。まず第一に思い浮かぶのは、一等賞に当選した山名塩太郎が彼らに共通する原体験としての日露戦争に言及していることである。

「回顧すれば勢己むを得ざりし貴国と我国との交戦も早幾年の昔と相成申候。（中略）われらが外国に於いて何人よりも諸君に対して不可思議なる親しみを覚え申候は、少年の時かかる経験を得たるが為に他ならずと愚考仕り候。故郷を離れたるものにして故郷なつかしきを感知すべく、相反発したるものの合同するに至って、始めて真の親睦は得らるべしと存候。されば両国の親善は自然の数かと被存候。昔は互に憎悪の眼を以って眺めし両国青年の親交！思えば泣きたく程嬉しく御座候」（山名）

山名塩太郎の手紙はこのように素朴でロマンチックな心情があふれている。

彼は東部戦線でのロシア軍の勝利を祈願をして筆をおいているが、文章全体の調子には、戦争否定への思いもまたつよくにじみでている。画家ヴェレシャギンに言及した部分がそうである。

「生は其の生涯を捧げて戦争の惨劇を写し、遂に旅順港にてペトロポウルスクと共に悲惨なる最後を遂げたるヴェレスチャギンの名画『屍の野』を思い出し、感慨に堪えざる次第に御座候」(山名)

ヴェレシャギンはフレーブニコフがとくに好んだ画家の一人でもあり、山名の言葉は彼の心に深くこだましたのだろう。『二人の日本人への手紙』で彼は山名に次のように応えることになる。

「頭蓋骨狩りのボルネオ人が小屋にヴェレシャギンの『戦争礼賛』の絵葉書を打ち付ける時、彼もまたわれわれの仲間となるだろう」(V—155)

いっぽう、森田東洋の手紙は、質実堅固でしかも叙情味にあふれる山名の文章とは多少趣が異なり、「ルースコエ・スローヴォ」紙が評しているように「内容的にはよりきばったもの」⁽¹⁵⁾ といっている。そこにはフレーブニコフのアジア観に通底する思想が脈打っており、この手紙に接した詩人は、たぶん驚きに近いものを感じたはずである。

「謂わば、あなた方は欧州の東洋人であります。それは私共の国が少なくとも極東の西洋であるように。(中略)それは西欧の文化と東洋の文化とが私共の国に於いて融合されたやうに、来たるべき将来に東洋の文化と北欧の文化とを調和させるものは、同くあなた方ロシアの青年でなければならぬ筈です」(森田)

森田は、日露両国の将来の友情を呼び掛けながら文を閉じている。

「さらば北半球の東洋人たる親友よ。私共に親しき手を与えよ。共に共に長く相携えて、人類の為扱ては大なる平和の為に、世界の活舞台上に重要な役目を演じようではありませんか。」(森田)

フレーブニコフはこの二人の日本人の手紙に対して、アジア青年たちの真の連帯を訴えるとともに、その具体案として東京での第一回アジア会議の開催を呼び掛け、この会議で審議すべき事項を13項目にわたって列挙した。「歌と発見のアジア日記」の作成、「スエズとマラッカに支線を持つヒマラヤ鉄道」の敷設、「アジア古典」にかんする討論、通信手段としての「数言語」の採用など、それらはユートピスト・フレーブニコフの本領を遺憾なく発揮するものといえてよい。詩人が、このアジア会議と、それを通してのアジア青年の連帯を実現させるために、どのような具体的道筋を予想していたかは分からない。たしかに「ぼくらは東京に集合することができる。魂の運びについて語れる以上、われわれは、現代のエジプト人なのだから」といった言葉に見るかぎり、この詩人にとって具体性を持つということが、逆に限りないユートピア的幻想への飛躍を意味していたことが理解されるだろう。しかし、大戦によってあらゆる具体性をつみとられたこの時代においては、幻想として自立した世界のみが真に現実的な意味をもちえたのだということも理解しておく必要がある。

フレーブニコフにおけるアジア観の変遷という観点から見て、『二人の日本人への手紙』は二つの重要な側面を持っている。第一にそれは、詩人が「大人たち同士の戦争」と「青年たちの世界的同盟」という理念を対置させ、そこに отечество (祖国) と сынечество (子国) という二つの観念を重ね合わせている点である。ナショナリストとしての感性が「祖国」という通時相としての全体性への自己同一化にあるとすれば、アジア青年の連帯を、青年の国家 (сынечество) という、地理的空間とはまた別のレベルでの共時相のなかに求めようとする姿勢は、詩人の従来 of 汎スラブ主義的な世界観を、一挙にグローバルな視座へと押し上げるものといえることができる。第二に、アジア的自我の発見という問題がある。フレーブニコフが二人の日本人の手紙にみていたのは、たんに日露両国の友情といったレベルにおいてではなかった。彼は、東洋人の心の奥底にひそむ自我の静かなたぎりをそこに見て、意外な驚きに打たれたにちがいないのである。そして詩人は、それがアジア (Азия) という文字に先験的に刻印されていることも見てとっていた。それは、彼が「アジアは、яという言葉が発生しなければならぬ文字の破片なのだ」(V-155) と述べ、さらにこう書いているところからも理解できる。

「森の中で松の木を引き抜き、海のインク瓶にひたして、『われはアジアなり』(Я—Азия) の旗印を書くことにしよう。アジアには自らの自由意志があ

るのだ」(V—155)

つまりフレーブニコフは、アジアに「自由意志」があるということをおのれの実感と独自の詩的語源論を通して発見したということなのである。そしてそこに、地球的な規模にまで膨らみをみせる詩人の自我を重ねあわせていくことで、自らの行動理念として純化させ、「地球の代表者」というユートピア的な国家理念へと結晶させていこうとしていた。

われわれは時間の水差しと土壺に
人類の湿った粘土を焼く者だ (III—17)

「地球の代表者」の理念が、アジア的自我を基盤として成立していることはこの二行がはっきりと象徴している。「人類の湿った粘土を焼く者だ」という表現の背後にあるのは、アッティカの職人たちが崇拝した技術の神プロメテウスのイメージに他ならない。フレーブニコフは、『二人の日本人の手紙』で部分的に解き明かしたアジア (Азия) の詩的語源論を、その後『鎖を断つわれら』(1920-22) や『イスファーハンのラクダ』(1921) で発展させ、その冒頭の二文字 Az に、「解放されたわれ」(освобожденное я) の意味を見てとることになる。⁶⁶⁾ ソ連の研究者ドゥガーノフは、そうした自我のありようを「プロメテウスの叙情」と呼び、プロメテウスの妻としてのアジア (Азия) というギリシャ神話の匿されたコンテクストを明らかにした。⁶⁷⁾ しかし、いずれにしてもそれは、ヨーロッパを支配しているキリスト教的な衰弱した自我とはおよそ無縁な、ある意味では真に異教的な自我の発見だったといえてよい。

最晩年のフレーブニコフの作品において、日本のイメージはあまり大きな位置を占めているようには思えない。ポリシェヴィキ軍とともにイランに入った彼が、エンゼリーの町並みに「日本の猥雑な通り」(V—320) をなぞり、また、「時間の法則」発見の動機にまつわる「対馬」の思い出が『運命の板』でわずかに語られているにすぎない。しかし、その数少ない例の中でも『鎖を断つわれら』の次の一節は、詩人の到達したひとつの境地をはっきり示すものといえてよいのではないか。

彼方へ、彼方へ、イザナギが
ペルーンに物語を話して聞かせ

エロースが上帝の膝に腰をかけ
 神の禿頭の白髪が
 雪の白さを思わせる彼方へ。
 アムールはマア・エマにくちづけをして
 天がインドラと言葉をかわす彼方へ
 ユーノーがチコノクアートルと
 コレジオを眺め
 ムリリョにうっとりする彼方へ
 ウンクルンクールとトールとは
 片肘ついて
 基石を交えては仲睦まじく
 そしてアスタルターが
 北斎にうっとりする彼方へ、彼方へ（V-28-29）

極彩色で描かれた一巻の絵巻物を思わせる神々と芸術家の交歓の図——詩人がたぶんニーチェの『ツァラトゥストラ』を意識して書いたインテルメッツォ風のこの詩は、⁽⁴⁸⁾「調和世界」という晩年の究極的な世界観をもっともあざやかに写しだす部分である。イザナギがペルーンに「物語」を読んで聞かせ、アスタルターが北斎の絵にうっとりするという、いかにものどかな黄金時代の風景を、たとえば1905年の日露戦争における敗北の衝撃をうたった『ものはみなあまりに蒼く』の一節と比較してみよう。

そして波間をやぶにらみの浅黒い
 日本軍の神が歩んでいく。
 そしてその時だ、ぼくの口はもはや黙してはいられなかった。
 ペルーンは猛り狂ってキリストを突いた…（II-31）

このふたつのイメージの対比の中から、「対馬」以後の十五年の時の流れの意味したものがはっきりと読みとれるにちがいない。詩人フレーブニコフの足跡を、ナショナルリストティックな終末論から「調和世界」へと変貌し、上昇していく道筋と捉えることができるならば、そのふたつの変貌の節目で日本が果たした役割を決して過小評価するわけにはいかないのである。

注 本文中に引用したフレーブニコフの作品は、Ю. Тынянов, Н. Степанов の編集による *Собрание сочинений В. Хлебникова* в 5 томах, Ленинград, 1928-33 並びに Н. Харджиев, Т. Гриц の編集による *Неизданные произведения*, Москва, 1940 (本文中 Н—と略記) に拠った。カッコ内は巻数と頁数を示す。

- (1) Дм. Петровский. Воспоминания о Велимире Хлебникове. — *Леф* № 1, 1923, стр. 150.
- (2) クリビーン宛の手紙で、フレーブニコフは兵舎での生活を「詩人を理性なき動物へ変える地獄」と表現している。См. V-309.
- (3) 拙稿『『時間』の憑依—フレーブニコフ試論』(『ロシア・西欧・日本』1976。朝日出版社)を参照されたい。
- (4) См. Н. Харджиев. Новое о Хлебникове, *Russian Literature*, № 9, 1975 p. 7.
- (5) В. Хлебников. Отрывок из “Досок судьбы”. Лист 1, М., 1922, стр. 4.
- (6) ハルジエフが個人的に語ってくれた所によると、この手紙は、実際には Н,ブルリューク宛ではなく、マリネッティ宛に書かれたものであるという。
- (7) См. Н. Степанов. Велимир Хлебников, М., 1975, стр. 19.
- (8) См. В. В. Иванов. Свободный стих как способ видеть мир. — *Иностр. Лит.*, 1972, № 2, стр. 205.
- (9) См. *Садок судей* № 2, 1913, стр. 28 なお、「花子」一座のロシア巡業については、澤田助太郎著『小さい花子。プチト・ハナコ』(中日出版社。昭和58年)に、比較的詳しい記述がある。また、巻末の参考文献も参照されたい。
- (10) В. Хлебников. Битвы 1915-1917 г.г. Новое учение о войне, Пг., 1915, стр. 1.
- (11) Там же, стр. 8.
- (12) А. Лейтес. Хлебников — каким он был, — *Новый мир*, 1973, № 1, стр. 226.
- (13) 遣露使節団が各方面に配付した「国民新聞」記念号は、当時ロシアでもっとも人気のあった「ルースコエ・スローヴォ」紙に紹介された。「国民新聞」10月25日号は、「賞賛の的となった国民新聞。露国新聞競って感謝の意を表す」という見出しを掲げて、その反響ぶりを詳しく報道している。また、11月9日号には、「サラトヨフの青年アレサンドル・スドフラートフ」がロシアの新聞社を通じて、山名塩太郎とエスペラント語での「通信の交換」を希望してきた旨が紹介されている。
- (14) 「ヴレメンニク」第一号の巻末では、10月21日となっているが(См. V-348)これは間違いである。フレーブニコフは、『手紙』の中で「国民新聞を読んだ」と書いているが、実際は「ルースコエ・スローヴォ」紙であったろう。同紙がなぜ、山名(1位)と森田(3位)の二通のみを掲載したのかは不明である。「スラブ魂」と「大和魂」の団結をうったえる村田要助の手紙が、編集局の意に沿わなかったということも十分に考えられる。ただ、疑問点として提出しておきたいのは、フレーブニコフが果たして実際に「国民新聞」記念号に眼を通さなかったのかという問題

である。たとえば、詩人は『手紙』の中で「ぼくは、むしろ、古い日本語で話す若い日本人を、現代ロシア語で話す何人かの同国人よりも理解したいと思う」と書いているが、山名の手紙が、森田や村田の口語体とは異なった、候文で書かれていることから考えて、詩人が「国民新聞」を実際に見た可能性をまったく否定するわけにはいかない。ただし、彼はこの時期、故郷アーストラハンに待機中であり、国民新聞を入手することがきわめて困難な状況にあったことは事実である。

- (15) “Русское слово” от 21 сентября 1916 года.
- (16) См. А. Парнис. В. Хлебников в революционном Гиляне. — Народы Азии и Африки, № 5, 1967, стр. 162.
- (17) См. Р. Дуганов. Проблема эпического в эстетике и поэтике Хлебникова. — Изв. АН СССР, СЛЯ, 1976, № 5, стр. 428.
- (18) См. ф. Ницше. Так говорил Заратустра, М., 1900, стр. 207–208. 手塚富雄訳『ツァラトゥストラ』(中央公論社。昭和48年) 232頁参照のこと。
- (19) フレーブニコフの日本観の変遷を考える上で見落とすことのできない問題のひとつに、日本のシベリア出兵がある。1918年8月日本は、対ソ干渉戦に苦慮するチェコ軍の支援を名目にシベリア出兵を宣言するが、その直後に彼が、アーストラハンで起草した宣言文『インド・ロシア同盟』には、彼の日本観の微妙な変化をうかがわせる次のような文章がある。「見たまえ。アジアはたったひとつだ。だが、どれほど多くの花婿がいることか。日本人、イギリス人、アメリカ人と」(См. ЦГАЛИ, Ф-527, оп. 1, ед. хр. 112) しかし、現段階ではこの問題を展開するための資料が決定的に不足しており、断定的な結論を避けるため、本稿ではあえて触れなかった。

Хлебников и Япония

—О “Письме двум японцам”—

Икуо КАМЭЯМА

Япония имела огромное значение в личной и творческой биографии В. Хлебникова. Уже в ранние годы он заинтересовался Японией, ее языком. Всю жизнь следил он внимательно за ее историей. Хлебникова потрясла гибель Тихоокеанского флота в “Цусиме” 1905 года, и это послужило поводом к решению: найти “закон времени”. Интерес к Японии в наиболее ярком его виде проявился в “Письме двум японцам”, написанном под непосредственным влиянием “Писем дружбы” японской молодежи, которые привезла японская дружественная делегация во главе с принцем Кан-ин в сентябре 1916 года. “Письмо двум японцам” сыграло важную роль в поэтическом творчестве и

мировоззрении Хлебникова в двух отношениях: здесь он впервые противопоставляет понятие “сынечество” юношей Азии, в том числе России, понятию “отечество” взрослых людей, увлекающихся войной. В виде манифеста он впервые заявляет о своей антивоенной позиции. Во-вторых, он в нем упоминает о своем азийском “Я”. После революции главным принципом его действий стала идея о “Председателе Земного Шара”, но она в основе была поддержана идеей “азийского” (прометеевского) “Я”. В процессе преобразования мировоззрения Хлебникова от своеобразной эсхатологии к идее “Ладомира”, нельзя недооценивать роль Японии как исходного пункта его идейного приближения к Азии.